

私のターニング・ポイント

Turning Point

第76回

世間の良識に逆らって 自分の良識を貫いたことが、 新しい時代の扉を開いた

今野氏は、「女性は25歳までに結婚して退社」が当たり前だった時代に起業した、日本の女性ベンチャー起業家の草分けだ。世間や法律などと戦い続けたその人生は、多くの後進たちの道を開いた。しかし、起業直後に余命宣告を受けていたという。



今野由梨

ダイヤル・サービス株式会社代表取締役社長・CEO

Yuri Konno

1936年、三重県生まれ。津田塾大学英文学科卒業。69年にダイヤル・サービスを設立し、71年に日本初の電話育児相談サービス「赤ちゃん110番」を立ち上げる。79年、新生活科学研究所を設立。98年、世界優秀女性起業家賞を受賞。2007年、旭日中綬章を受章。

取材・構成 林 加愛

原点となった 9歳での空襲の経験

起業して50年余り。今年で85歳になりますが、いまだ現役。そんな私は、よく「その健康と体力の秘訣は何ですか？」と聞かれます。

しかし、実を言うと、私がここまで生きてこられたのは奇跡です。九死に一生を得るような経験を、何度も味わいました。

最初は9歳のとき。1945年7月、住んでいた三重県桑名市が米軍の空襲を受け、家も学校も一夜にしてすべて灰と化しました。私はその中で家族とはぐれ、逃げ惑ううち、身近に激しい直撃を受け、「死にました」。見知らぬ男の人に背負われて息を吹き返し、リボンとして、第2の人生を生きることに。

このときの恐怖は心に深く刻まれました。私は戦争を憎み、「許さない」と思いました。

子供が恐怖と共に殺されるような世の中を絶対に変える。いつかこの爆弾を落とす米軍に行つて「戦争を止めよう」と言う。そして、2度と戦争が起きない世界を作れるような仕事にきつと就く……。幼い私は、そ

う神様に約束しました。

思えば風変わりな子供です。当時は、女性が仕事をするとこるか、「女子に学問など必要な」と言われていた時代。それでもこの志は変わらなず、18歳で、周囲の反対を押し切って、東京の4年制大学へ進学しました。

が、就職活動では見事に全敗。大卒の22歳の女性など、企業からは、お呼びでなかったのです。ならば、会社を自分で作るしかならない。「10年後の69年に、必ず起業する」と決めました。

「子殺しの時代」に 直面して使命を知る

そこからは、資金と経験を積むために奔走。学生時代のアルバイトで得たご縁を通じて、『随筆サンケイ』に記事を書いたり、TBSの番組で取材記者をしたり。作家の三浦朱門さん、曾野綾子さんご夫妻のもとで口述筆記や取材のお仕事もしました。

そのご夫妻が、「ニューヨーク世界博で日本館のコンパニオンを募集している」と教えてくださったのは、26歳のときのこと。いつか米国へ行こうと誓っていた私にとって千載一遇のチャンスです。果敢に応募して、その

椅子を射止めました。

そこで再び、信じられない大きな奇跡を経験しました。日本館に取材に来た記者が、なんとあの夜、桑名を爆撃した兵士だったのです。彼はあのあと、戦争の後遺症で心を病み、その影響で半身不随になっていました。車椅子の彼と振袖姿の私は、手を取り合つて涙を流しました。

そして、「2度と戦争で不幸な子供を作らない」という誓いを共有しようと、全米の新聞に私の全一面の写真載せてくれたりと、信じられない応援をしてくれました。

その後、私はさらに見聞を広めるため、再び海外へ。西ベルリンを拠点に、通訳など、片っ端からアルバイトをしながら世界中を旅しました。帰国したのは3年後です。そのとき私は、日本の実態に愕然としました。

高度経済成長に湧いていたこの時代は、「子殺しの時代」でもありました。育児に疲れた母親が子供を殺める事件が続発。コインロッカーに嬰兒を捨てる事件も起きていました。お金儲けに邁進しながら人の心が置き去りにされる社会を、絶対に見逃ごせないと思いました。

今野氏のターニングポイント

32歳



起業した頃の今野氏

そこで立ち上げたのが、電話による育児相談サービスです。10年前に心に決めた69年に起業。そして、71年に始めた「赤ちゃん110番」には、全国から電話が殺到し、何度も電話回線がパンクしたほどでした。

「余命宣告」も無視。 今、死んでいる暇はない!

長年の念願が叶って起業をした32歳のとき、「さあ、これから」というまさにそのとき、私は余命宣告を受けました。超悪性末期がんで、あと1〜2カ月。即日入院、と。

先生を振り切つて病院の外に飛び出した私の上に、見たこともない澄んだ青空が広がっていたのを、今もありありと覚えています。「空って、こんなに綺麗だったんだ」と。子供の頃から天文少女だった私、空を見続けていた私が!

先生方が叫ぶ声が聞こえる。即日入院、手術……!

私は叫びました。「今、死んでいる暇などありません!」

電話回線をパンクさせるほどに私たちのサービスにすがりつくお母さんや赤ちゃんを見捨て、私だけが死ぬことができるわけ

がない。死んでいる暇などない!

国は、電気通信事業法、労働基準法、医事法、薬事法、その他様々な法規制を盾にし、私を何度も呼び出し、叱り続け、事業を止めさせようとしました。

しかし、私に言わせれば、電話回線がパンクするほどの数の悲鳴を放置していることのほうが、よほど問題です。それに応えることが法や制度に触れるのなら、法や制度に問題があるのです。私はそう叫び続け、ついに法規制を変え、通話料と情報料の二重課金制という新しい制度の確立につながりました。

日本のベンチャーの 「草分け」として

その後も、毎年、「あと1〜2カ月」と言われ続けましたが、一貫して、私には死んでいる暇なんかありませんでした。

前例のない事業という獣道を、法規制に抗つて進んだ私は、同じように医療の常識にも従わなかったのですが、結果として、この国の新しい時代の扉を少しだけ開くことができました。

現在、多くのベンチャー起業家が、私を先人として慕つてくれています。孫正義さんが「あの

時代に、この国に今野由梨がいなければ、今の僕もいない」と言ってくれるのは、本当に嬉しい限りです。ベンチャーの母と言われ、今では「国境なきお母さん」と言ってくれるすこい息子、娘たちが、中国や韓国をはじめ、各地にたくさんいてくれる。

それでも、まだまだ道半ば。今も、つらい思いをしている子供は世界中に無数にいます。戦争、貧困、環境問題……。

次世代を担う子供たちを苦しめるあらゆることと、私はこれからも、命ある限り、愛する彼らと共に戦い続けるでしょう。

「子ども110番」、「熟年110番」、さらに、若者、障害者、外国人の方々を対象に次々とサービスを展開する中、松下幸之助さんに出会い、厳しく温かいご指導とお力添えをいただいたことは、今も、そして生涯、忘れることなどありません。

今後も、どんな苦しい試練に出会っても、松下幸之助さんからいただいた、国を、人を想う利他の心、使命を忘れることなく、頑張ります。

地球が試練のとき、次なる使命に向かいます。これからも、ご指導をいただきますように!